要 約

報告番号	① 乙 第	号	氏 名	水 野 裕 也
主 論 文 題 名				
Clinical and biological correlates of resilience in patients with schizophrenia and bipolar disorder: A cross-sectional study (統合失調症および双極性障害患者におけるレジリエンスと関連する臨床的・生物学的要因：横断研究)				
(内 容 の 要 旨)				
<p>レジリエンスとは、「著しい逆境が存在する中、個人が精神的な健康と良好な適応を獲得する動的過程」と定義される (Luthar et al., 2000)。従来、統合失調症や双極性障害を対象とした医学研究は病的過程を強調する傾向にあったが、これらの患者における臨床転帰の多様性を説明する上で、回復過程 (レジリエンス) と関連する臨床的・生物学的要因を明らかにすることは重要と考えられる。本研究では、統合失調症および双極性障害患者の主観的レジリエンスと関連する臨床的要因について包括的に検討するとともに、血中および唾液中の生物学的指標との関連について予備的に検討した。</p> <p>過去6ヶ月間、臨床的に安定した統合失調症および双極I型障害 (アメリカ精神医学会診断基準) の外来患者各60名と、健常者60名を対象とした。主たる評価項目として、25項目の質問で構成されるResilience Scale (RS) を用いて主観的レジリエンスを測定した (総点の範囲：25-175点、高得点ほど高レジリエンス)。また、人口動態的指標に加え、臨床的意義が高い要因 (精神症状および社会機能)、病前要因 (病前適応および病前知能)、その他の心理的要因 (病識、服薬態度、自尊感情など計7項目) を諸尺度により評価した。生物学的指標としては、血中脳由来神経栄養因子、副腎皮質刺激ホルモン、コルチゾール、高感度C反応性蛋白および唾液中α-アミラーゼを測定した。</p> <p>まず、健常群におけるRS総点の平均 (130.1、95%信頼区間：124.8-135.4) が統合失調症群 (109.9、95%信頼区間：104.6-115.2、$p<0.001$) および双極I型障害群 (119.0、95%信頼区間：113.8-124.3、$p=0.012$) と比べて有意に高い一方、患者群の間では有意差を認めなかった ($p=0.055$)。RS総点と臨床的要因との相関分析では、正の相関を示す要因として自尊感情、スピリチュアリティ、生活の質が同定され、負の相関を示す要因として絶望感、内面化されたスティグマ、抑うつ症状が同定された (すべて$p<0.05$、Bonferroni補正後)。一方、精神症状や社会機能を含む他の臨床的要因との間には有意な相関を認めなかった。RS総点と生物学的指標との相関については、有意水準に達しなかった (すべて$p>0.05$)。</p> <p>本研究は、統合失調症および双極性障害患者における主観的レジリエンスと関連する臨床的・生物学的要因について包括的に検討した点で新規性が高い。本研究で同定された臨床的要因に着目した心理的介入を行うことで、将来的には同患者のレジリエンスを促進できる可能性が示唆される。本研究の知見を踏まえ、今後は主観的レジリエンスの経時的変化および臨床転帰との関連を明らかにするための縦断研究や、レジリエンスの生物学的基盤に関するさらなる検討が必要である。</p>				